

日本臨床薬理学会 海外研修員 報告書  
研修経過報告書 第一報  
西沢知剛

Research Institute of the McGill University Health Centre  
Meakins-Christie Laboratories

『はじめに』

2023年6月より、カナダ・モントリオールの、Research Institute of the McGill University Health Centre に留学させていただいております。モントリオールは、ケベック州に属し、第一公用言語はフランス語です。都市部は英語が通じますし、大学内は英語が公用語です。11月になると雪が降りだし、体感的な寒さ、いわゆる冬と感じる季節は4月まで続きます。短い夏はみんなあまりたくさん仕事を入れず、レジャーを楽しみます。モントリオールでの余暇も楽しいですが、大都市トロント、フランス文化を強く継承している美しい街並みのケベックシティまで、鉄道で数時間程度なので、週末に足を延ばすこともできます。現在12月ですが、セントラルヒーティングで室内は日本のそれより暖かく、驚くほど快適に過ごせています。外は確かに寒いですが、こちらで売っている防寒具がしっかりしているので、氷点下でも思ったよりは寒く感じません。それぞれ、6、4歳の子供たちは雪遊びを楽しんでいます。また地下鉄、バスが便利なので車を持たなくても、移動がスムーズです。

『研究室の雰囲気について』

指導教官は、M.D., PhD.の Dr.Martin で、いままで16人もの日本人を受け入れてきた先生で、ゆえに親日家です。私の業績から考えると、そのような背景があるこの研究室でなければ、受け入れは難しかったと確信しており、いままで来られていた日本人の先生方が紡いでくださった信頼の上に研究生生活をおくれていることに感謝しています。英語が全然得意でない状態で渡航しましたので、最初は、How are you?、程度の初歩的な英会話しかできず、研究室ミーティングはおろか、日常会話も理解できず、コミュニケーションに難渋しました。この年齢での留学なので、言語の壁は高いものがあり、考え方も違うので、コミュニケーションに難渋することはしばしばあります。そのため、誰に対しても礼を尽くし、相手の気持ちを汲みつつ、かつ自分の意見も適切に述べることを心がけています。人間関係の構築については、日本にいるときと何らかわりないかもしれません。時々研究室のメンバーで、ホームパーティーをしたり、小旅行に行くこともあり、それに家族も一緒に仲間に入れていただけて楽しく過ごしています。

『研究内容について』

感染や環境刺激性におこる好中球性喘息（通常の喘息はアレルギー性が多いです）に対し

て、ある種のサイトカインがどのような過程で保護効果（抗炎症、肺機能悪化抑制）をもたらすのか、ということを中心にテーマで実験をしています。特に自然リンパ球、肺胞マクロファージの挙動について関心をもって研究しています。こちらにきてから教えていただいた、マウス実験にも慣れてきました。失敗もかなり多いのですが、研究室の、メンバーの方に助けられながら、なんとか継続しています。2024年4月には、トロントの呼吸器学会で発表させていただくことになりました。喘息の治療は、吸入ステロイド/長時間作用型 $\beta$ 刺激薬、ロイコトリエン受容体拮抗薬などのほかに、各種サイトカインをターゲットとした抗体療法が臨床現場にでてきて久しく、実際の治療において活躍しています。そのような背景を意識して、可能であれば将来的な薬物治療につながる研究を目指して、取り組んでいきたとと考えています。

時がたつのは早く、もう半年目に入り、本原稿を書かせていただいております。この半年を振り返って自分なりに分析をして、残りの約1年半の時間を有意義に過ごせるよう、つとめてまいりたいと思います。こちらでの研究生活を行うにあたり、日本臨床薬理学会の先生方、事務局の方、そして東京慈恵会医科大学臨床薬理学講座の志賀剛先生に心より感謝申し上げます。